

# 地域に伝わる仏像のハイビジョン映像化と その活用に関する研究

見 田 隆 鑑\*・柝 窪 優 二\*\*

A Study on a Project Designed to Make and Utilize HD Video Records  
of Buddha Statues in Local Areas of Japan

Takaaki MITA and Yuji TOCHIKUBO

## はじめに

本稿は、平成24年度椋山女学園大学学園研究費(C)の助成にもとづく「地域に伝わる仏像のハイビジョン映像化とその活用に関する研究」と題する研究課題（研究代表者：見田隆鑑，研究分担者：柝窪優二）および、平成25年度椋山女学園大学学園研究費(A)の助成にもとづく「地域連携によるバーチャルミュージアムサイトの構築とその実践的研究」と題する研究課題（研究代表者：見田隆鑑，研究分担者：柝窪優二，柴田亜矢子，渡邊康，ウィリアム・ペトルシャック）の中で、共同研究の形で行った稲沢市に伝わる仏像のハイビジョン映像化の過程と所有者および学生・市民の評価も合わせた現時点（平成25年9月）までの成果について報告するものである。

## 1. 映像化の目的と意義

### 1-1. プロジェクトの目的と意義

仏像は、仏教という一宗教の信仰・礼拝の対象として制作され、寺堂に安置されるものであるが、「聖なる存在」を理想的に表現しようとしたその造形は、そこに表現された「美」を見る者が感じ取る側面も備えており、美術作品・彫刻作品<sup>1)</sup>として鑑賞の対象ともなってきた。仏像は寺院で会うものというだけではなく、博物館で鑑賞の対象となる場合も少なくない。特に、博物館では分かりやすく、効果的な展示方法が探求される中、展示資料としての仏像は人々を惹きつけ、仏像を対象とした展覧会は集客率も高く、「仏像ブーム」というような言葉も数年前には聞かれた。そのような中で、学術的な内容ばかりではなく、様々なアプローチで仏像を扱った書籍・雑誌も数多く販売されている。

---

\* 文化情報学部 文化情報学科

\*\* 文化情報学部 メディア情報学科

日本の仏像に関する映像作品もこれまで数多く制作されてきた。NHK制作の『国宝への旅』(1986年～1990年)や『平成古寺巡礼』(1996年～2001年)、テレビ東京制作の『極める』シリーズ(1986年～1995年)のようなTV番組での放映のみならず、ビデオ・DVD・Blu-rayなどの形でもかなりの数の作品が制作・販売されている。ただし、それらは基本的には仏像を扱う書籍や写真集に頻繁に登場する国宝・重要文化財に焦点をあてたものが多く、奈良や京都を中心とする主要かつ著名な寺院の仏像を映像化したものが多い。国内に残る優れた作品、またその寺院に焦点が当てられることは当然であり、それらは歴史的な背景を持つ作品や場であるとともに、鑑賞する人々を魅了する力を持つからこそ映像化の対象として選択されてきたのである。

では、身近な仏像に関してはどうであろうか。自分の住む地域にどんな仏像があり、それはどのような価値を持つものなのかを、地域の人々はどれくらい理解しているだろうか。国内の寺院は、観光寺院のように常時拝観を受け付けていない寺院の方が圧倒的に多く、地域の人々は檀信徒や信者として仏事で寺院に足を運ぶことはあっても、地域の寺院に仏像だけを見に行く機会というのはほとんどないのではないだろうか。仏像だけを見にやってくる人は、むしろ文化財などに関心を寄せる地域の外の人であることが多いと考えられる。また、仏像によっては文化財保護のために収蔵庫などで管理され、一般には非公開の形を取っているものもあり、「秘仏」という信仰上の事情により厨子も開扉されない場合もある。

身近な地域の文化財をどのような形で保存しながら活用し、学校教育や生涯学習、地域の活性化などに活かしていくことができるだろうか。本プロジェクトでは、「地域」としてかつて尾張国衙(尾張国府)、尾張国分寺・国分尼寺が置かれた愛知県稲沢市に焦点をあて、この地域に伝わる仏像を映像化していくこととした。

今回のプロジェクトでの「地域」とは、現在の行政区での稲沢市になるが、名古屋市に移座している七寺の仏像のように、かつて稲沢の地に安置されていた仏像もその対象に含めており、基本的には“尾張国府および尾張国分寺・国分尼寺を中心とした周辺地域の寺院と仏像”を現在の映像化の範囲と捉えている。

稲沢市は、かねてより行政が文化財の保存・活用について積極的に取り組んできた地域で、地域の文化財を対象とした編さん事業の成果としての『新修稲沢市史研究編2 美術工芸』は、その内容が高く評価されており、市教育委員会等が中心となって市内の文化財を紹介した冊子やリーフレット等も制作し、講演会・講座の開催とともに、市民が地域の文化財を巡るイベント(「文化財デー」)も行われるなど、文化財の情報を積極的に地域社会に発信し活用していく姿勢が見られる。

また、稲沢市では文化財保護にあたり資金的にも管理者の負担を少なくする努力がなされてきたこともあり、行政と文化財の管理者である寺院との間に十分な信頼関係が構築されている点も特筆される。市のこれまでの努力も、今回のようなプロジェクトを地域(特に管理者)に受け入れてもらう上で大きな意味を持っていたと言える。

「地域」の仏像を紹介する既存の映像作品には、例えば、NHKが制作した『につばん 心の仏像100選』、『知られざる仏・50選』などのように、視聴者から寄せられた手紙やメールによって番組を構成し、選ばれた仏像を紹介していく中で、地域で信仰される仏像や路傍の野仏などが紹介される事例がある。また、いとうせいこう氏とみうらじゅん氏

による『TV見仏記』シリーズのように、様々な地域の寺院を参拝し、そこに祀られる仏像を取り上げていく中で、特に文化財指定を受けていないような仏像が映像で紹介される事例もあり、大変人気を集めている。しかし、これらは撮影対象や特定の寺院を選んだ際にその対象や寺院が存在する地域を取り上げるもので、特定の地域をアーカイブ化していくものではない。また、これらは放送局やプロダクションが制作した作品であり、予算をはじめ諸条件が整ってはじめて制作・公開が可能となるものである。予算だけをとってみても行政が地域の文化財について同種の映像作品を制作し、情報発信していくには負担が大きい。

今回のプロジェクトは大学の教育研究活動の中で映像制作を行っていくものであり、行政や地域に対して制作費を求めることはなく、同時に映像制作を通じた利益も求めている。地域の協力のもとに得られた映像制作の機会を通し、大学側は教員の研究活動および学生の教育活動に活かしていく。そして、制作した映像作品は協力寺院をはじめ地域に還元し、地域において活用を図ってもらう形をとっている。また、ホームページも作成し、インターネット上での映像作品の公開も行っている。大学におけるこのような試みは、現在はほとんど行われておらず、大学と地域が連携して行うプロジェクトとして先駆的な取り組みと言えるだろう。YouTubeなどの動画投稿サイトを通して個人(あるいは団体など)が制作した仏像に関する動画を配信している例も見られるが、本プロジェクトは単にハイビジョン映像を作ってインターネット上に配信するというだけではなく、それらを継続的かつ体系的に扱っていくことも目指しており、内容に関しても教育的な配慮にもとづいた作品を発信することを通して、地域に貢献することを目指している。

## 1-2. 映像コンセプト

プロジェクト開始にあたり、映像作品の制作については下記の基本コンセプトを決めた。

### 【映像作品の基本コンセプト】

- ・インターネットでの動画公開を前提に制作し、1本の長さは4分程度
- ・ハイビジョンで撮影し、Web映像版のほか必要に応じてDVD版やBlu-ray版も制作
- ・一般の市民が興味を持って理解できる内容をめざす
- ・ただし専門家からも一定の評価が得られる映像記録をめざす
- ・映像にナレーションや字幕スーパー、インタビュー、音楽等を入れる
- ・ナレーターはゼミ学生が担当、リポーターやナビゲーターは起用しない
- ・撮影、編集、ナレーション収録、音声処理、字幕スーパー処理など、映像制作に必要な作業は、外部委託はしないで、すべて大学で行う
- ・ただし、音楽については、必要に応じて、外部に制作依頼する

基本コンセプトのなかの音楽とナレーターについて補足説明する。これまで大学制作の映像作品では使用許諾契約をしている音源を使用してきた。しかし今回は仏像がテーマなので、このイメージに合った音楽はそこにはない。このため1年目は名古屋在住の作曲家 mari 氏に、この作品シリーズ用にオリジナル音楽の制作を依頼した。mari 氏はこの取り組みに共感し、ボランティアで音楽制作を引き受けてくれた。2年目以降は制作依頼する作曲家を学内関係者に広げて対応した。一方、ナレーターについては、レベルの高いナ

レーション表現が求められることから、本来は専門家（プロのナレーター）に依頼する必要がある。しかしながら大学が主体で取り組む地域連携プロジェクトであり、この取り組みに学生を積極的に参加させ、質の高い教育を実践して教育効果をめざすことも重要と考えて、あえて希望する学生にナレーターを担当させた。そうした判断が妥当かどうかは、2013年度のプロジェクト終了後に、作品シリーズ全体を分析・評価して総合的に判断することにした。

## 2. ハイビジョン映像化

2013年9月までに制作・公開した映像作品は下記の6本である。①～③は2012年度に制作、④～⑥は2013年度に制作した作品である。

### 【仏像の映像化】

①稲沢市北島町 青宮寺 木造聖徳太子立像	3分59秒
②名古屋市中区 七寺の木造観音菩薩・勢至菩薩坐像	4分10秒
③稲沢市六角堂東町 長光寺の鉄造地藏菩薩立像	3分50秒
④稲沢市中之庄町 無量光院の阿弥陀如来および両脇侍坐像	3分58秒
⑤稲沢市船橋町 安楽寺の木造釈迦如来坐像と阿弥陀如来坐像	4分18秒
⑥稲沢市船橋町 安楽寺の兜跋毘沙門天立像	3分37秒



### 【完成作品の映像画面】

こうした作品は、仏像を所有・保管する寺院の撮影許可と動画公開の同意を得たあと、①撮影台本（ナレーション原稿）作成、②カメラ撮影、③映像編集、④ナレーション収録、⑤音響効果（選曲・音声調整）、⑥字幕スーパー処理、⑦仕上げ・最終確認、といった制作工程を経て作り上げた。このうち③～⑦は大学にあるコンピューター使用のノンリ

ニア映像編集システムで対応した。

## 2-1. 撮影台本（ナレーション原稿）の作成

撮影台本の作成は見田が担当した。専門的な視点から多くの内容を台本に詰め込みたくなるが、4分前後の時間に盛り込める内容は限られるため、提示できる情報は取捨選択が必要になった。また、映像作品の場合、論文や作品解説のように文章を読んで文字（視覚情報）を通して理解してもらうわけではなく、視聴者は映像とともに主にナレーション（聴覚情報）により情報を得るため、映像を視聴しているその場で理解してもらうためにはどのような言葉を選択していくかも大きな課題となった。

特に仏教用語は、漢訳經典に記述される言葉をそのまま専門用語として使用するものが多いためにそもそも難解な言葉が多く、ナレーションによる聴覚情報だけでは理解しづらいものが多い。また、一般的な漢字の読みとは異なるものも多く、音声を聞いて直接該当する言葉が思い浮かばないケースも多い。例えば、今回映像の中で使用された言葉（寺院住職のコメント内）でも「しょうとくたいしえ」という音声から、「聖徳太子会」という法会（ほうえ）のことではなく、「聖徳太子絵」という絵画作品を連想される場合があった。

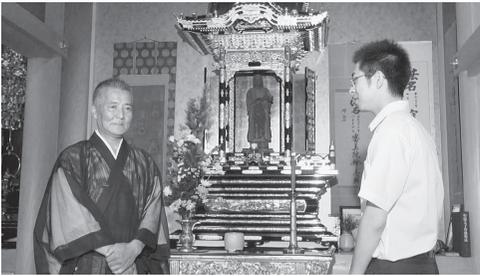
もちろん、このような場合、字幕スーパーで補えるが、その都度、字幕で表示するのも煩雑になり、字幕の存在が映像作品そのもののノイズになってしまうため、この点に関しては必要に応じて分かりやすい言葉へと置き換えていく必要があった。視聴者が映像に集中しながら、いかに分かりやすい言葉で解説を加えて行くか、そのための原稿をどのように書くかが課題であった。原稿は、見田が執筆したものを柘窪が確認し、撮影担当の柘窪は映像のイメージ、カメラの動きも含め原稿の流れを修正し、それを再度見田が確認する作業を繰り返し、双方のすり合わせが終了した完成原稿をもとに撮影に臨んだ。【資料1】は、七寺像に関する撮影前の第3稿である。

この原稿も、音楽を入れた状態での作品全体のまとまりを考慮し、ナレーションを追加・削除する場合もあった。また、学生が声に出して原稿を読んだ際に、読みづらい不自然な文章表現が見つかるため、ナレーションを収録する際に再び改訂される場合もあり、これらの過程ですらに分かりやすい言葉に気付かされる場合もあった。完成作品でも、細かく指摘を受ければ視聴者の理解が及ばない用語が情報として使用されていると思われるが、後に取り上げる視聴者のアンケート結果を見る限り、全体の内容に関しては一定の理解を得られているものと思われる。

## 2-2. 映像の撮影

カメラ撮影は、SONYの業務用HDカメラ「HXR-NX30J」と、カメラ三脚、ミニライト照明（400W）、撮影用LED照明を使用して、著者（柘窪）が担当した。カメラマンが仏像を撮影する場合、最も難しいのは「映像の動き」だと考えている。映像作品の場合、1枚写真ではなく、動く映像をつなぎ合わせて、4分程度の作品を作り上げる。今回の場合、被写体は全く動かない仏像なので、カメラやそのレンズを動かして、作品に求められる映像を表現する必要がある。したがったカメラマンは、構図やアングルを決めて固定アングル（フィックス）撮影する他に、レンズのズーム操作によるズームイン・ズーム

アウト、レンズのフォーカス操作によるフォーカスイン・フォーカスアウト、カメラの向きを動かすパンやフレームイン・フレームアウト、カメラ本体を移動しながら撮影するドリーなど、様々なテクニックを駆使して撮影することになる。こうした撮影カットは、台本を作成した段階で、ラフなカット割りを決めて、それを参考に現場で撮影するスタイルが基本になるが、慣れてからは現場で判断して撮影した。今回はクレーンなどの撮影補助機材は使用しないので、カメラ本体を移動しながら撮影するドリーは「手持ちドリー」となった。しかし最新のカメラを使用したので、手ぶれ補正が効果的に機能して、手持ちでも違和感のない映像を撮影することができた。仏像映像はカットを変えながらつなぎ合わせ、それにナレーションを入れる古典的な作品構成である。カメラマンにとっては、まさに本物勝負の撮影となった。撮影に要した時間は1作品あたり2時間程度であった。



【寺院住職へのインタビュー風景】



【撮影風景】

### 2-3. 編集・仕上げ

編集・仕上げは、トムソン・グラスバレー社の編集ソフト「EDIUS Pro 5」を使ってコンピューターによるノンリニア編集で行った。「EDIUS Pro 5」はテレビ現場で最も多く使われている編集ソフトの一つである。撮影カメラは、SONYのNXCAMシリーズで、映像はSDカードにAVCHDデータで記録される。そこでパソコンに撮影データを移行し、音楽データも取り込んで、編集プロジェクトを作成して作業を開始した。今回の場合、現場での取材はカメラ撮影が中心で、仏像紹介・ナレーションに必要な情報は文献調査や下見等で事前に把握している。このため作成した撮影台本は完成度が高く、それを参考に編集作業を進めた。映像編集はナレーション原稿を意識して、それに対応する映像をつなぎ合わせるが、状況によっては仮ナレーションを入れて、作品全体のイメージを確認しながら、編集することもあった。映像がほぼ完成したあと、字幕スーパーを作成し、音楽を選曲して付け、ナレーションを収録・編集し、仕上げ・最終確認をして、作品を完成させた。こうした作品では、インタビュー部分を除いて全てナレーションになるので、ナレーションの区切りを明確にして、部分的に音楽だけで伝える（ナレーションのない）シーンを設定し、作品全体のメッセージ性を高める工夫をした。編集・仕上げに要した時間は1作品あたり、ナレーション収録も含めて5時間程度であった。



【ノンリニア編集システム】



【編集画面】

### 3. 映像作品の分析・評価

#### 3-1. 視聴者の評価

##### ① 学生からの評価（「稲沢市北島町 青宮寺 木造聖徳太子立像」を視聴）

見田が担当する「デジタルアーカイブ論」の講義の中で「稲沢市北島町 青宮寺・木造聖徳太子立像」を視聴した学生からの声（自由記述形式のリアクションペーパー）では、概ね良好な評価が得られた。例えば、映像に関しては、「素材の質感が出ていた」、「傷や彩色の剥落など細かい部分まではっきりと見ることができた」、「顔の映し方が印象に残った」といった評価があり、演出全体では、「音楽と内容があっていた」、「画質が綺麗で音楽も聞きやすかった」などの評価が得られた。

また、稲沢市およびその周辺地域から通学している学生からは、「地元の文化財が取り上げられてよかった」、「地域の文化を知れてよかった」という評価があり、自分たちの地域の文化財が取り上げられることに対して好感を得ていること、地域に関する気づきが生まれていることがわかった。自分の故郷が取り上げられることは、学生にとっても喜びに繋がることを感じさせられた。

一方で、「もう少し詳しい情報が欲しい」、「仏像とその土地の歴史についてもっと詳しく説明して欲しい」という映像内の言葉・説明の情報量に関する意見もあった。約4分間の中でわかりやすさ、聞き取りやすさを考慮して提供できる情報量は限られるため、この点は、ホームページなどで映像作品を公開していく際（デジタルアーカイブにおける「プレゼンテーションの段階」）には、映像作品とは別の形でさらに詳しく知りたい人への情報提供手段を考えて行く必要があると感じた。

また、この作品では「真剣な表情」という言葉をナレーションで3回使用したため、この繰り返しの違和感を感じたという意見や、ナレーション、インタビューなどにぎこちなさを感じたという評価もあった。視聴した作品は初めて制作した作品ということもあり、不慣れな点も見られたことに対する素直な指摘と言えるだろう。

注目すべきは、4分程の映像ではあるが、学生が普段馴染みのない仏教美術に関する映像作品を集中して鑑賞している点である。様々な評価があったが、それらは学生たちが映像に向き合った証拠と言える。

## ②稲沢市民の評価

稲沢市民に関しては、稲沢市郷土史研究会主催による講座（2013年4月20日、於：下津市民センター）、および「地域歴史イベント おじぞうさん2013」における歴史探訪講演会（2013年7月27日、於：長光寺本堂）の講師を見田が担当した際に、本プロジェクトで制作した映像作品をプレゼンテーションの中にも含める形で紹介した。その際に、参加者にアンケートへの協力をお願いし、得られた結果が以下のとおりである。両日ともに文化財や伝像に関心のある市民の集まりであるため、内容が受け入れられやすい場ではあったと思われるが、映像作品がどのように受け取られたかを見てみよう。

視聴アンケート<sup>2)</sup>—その1—（回答数：45名） 2013年4月20日 下津市民センター

## 1. 映像作品はどうでしたか？

良い（5）	29	
まあ良い（4）	14	
普通（3）	2	
あまり良くない（2）	0	
良くない（1）	0	
	計	45 平均：4.6

## 2. 映像の内容は伝わりましたか？

伝わった（5）	32	
まあ伝わった（4）	12	
普通（3）	1	
あまり伝わらなかった（2）	0	
伝わっていない（1）	0	
	計	45 平均：4.7

## 3. このような映像作品を通して地域の文化を発信していくことに意義を感じますか？

感じる（5）	39	
まあ感じる（4）	5	
普通（3）	1	
あまり感じない（2）	0	
感じない（1）	0	
	計	45 平均：4.8

## 4. この映像作品をどこで視聴できるとよいと思われますか？（複数回答可）

自宅	7
学校	17
図書館	15
美術館	13
公民館	21
駅	1

地域に伝わる仏像のハイビジョン映像化とその活用に関する研究

市役所	7
インターネット	18
その他	0

5. 自由記述

- ・大変良い勉強ができました。遺跡や遺産に興味が深まりました。
- ・とっても良かった。今後楽しみにしている。
- ・内容も良く、またプレゼンテーションが良い。
- ・ナレーションが少し高過ぎないか。
- ・実物をもっと見ることが出来るとよい。
- ・普段見ることが出来ない仏様がアップで見ることが出来よかった。
- ・解りやすい説明でとてもよかったです。お寺が身近に感じました。
- ・六角堂に是非行ってみたいです。
- ・地元の寺を映像で見て身近に仏様を感じた。

視聴アンケート—その2—（回答数：26名） 2013年7月27日 於：長光寺

1. 映像作品はどうでしたか？

良い（5）	18	
まあ良い（4）	7	
普通（3）	1	
あまり良くない（2）	0	
良くない（1）	0	
計	26	平均：4.65

2. 映像の内容は伝わりましたか？

伝わった（5）	20	
まあ伝わった（4）	5	
普通（3）	1	
あまり伝わらなかった（2）	0	
伝わっていない（1）	0	
計	26	平均：4.73

3. このような映像作品を通して地域の文化を発信していくことに意義を感じますか？

感じる（5）	25	
まあ感じる（4）	1	
普通（3）	0	
あまり感じない（2）	0	
感じない（1）	0	
計	26	平均：4.96

## 4. この映像作品をどこで視聴できるとよいと思われますか？（複数回答可）

自宅	7
学校	4
図書館	11
美術館	7
公民館	9
駅	2
市役所	4
インターネット	11
その他	寺 2

## 5. 自由記述

- ・見えないところまで見られる。
- ・大変勉強になりました。
- ・映像を見るだけではわからないので、解説をしてもらおうとよくわかる。
- ・仏像に興味があったので感激しました。
- ・稲沢市の文化財を編集して公開してください。
- ・良かった。
- ・ナレーションをプロで。
- ・素晴らしい内容でした。ありがとうございました。
- ・これからも映像を作ってください。
- ・よく分かる内容でした。ありがとうございました。
- ・近くのお寺へ訪ねて仏像が見られるといいですね。
- ・毎日お参りさせて頂いているが、明日から違った思いでお参りさせて頂けると思います。
- ・解説付きがよい。
- ・犯罪のない環境であるとよいのですが、現状では……。
- ・VTR、音声の女性のアナウンスをもう少しやわらかくした方がよいかも。再生レベルなど。
- ・映像の声がもっとゆっくり、しっとりした感じで語ってほしいと思いました。

以上のアンケート結果のように、市民の評価は概ね良好であったと言える。自由記述の中には、「ナレーションが少し高過ぎないか」、「音声の女性のアナウンスをもう少しやわらかくした方がよいかも」、「映像の声がもっとゆっくり、しっとりした感じで語ってほしい」という意見が見られたが、この点は中高年層を対象とした別の講座の中で映像を視聴した際にも意見があがった部分であった。学生からはこのような意見は見られなかったが、視聴者の年齢層により声の音域（声のトーン）、話すスピードによる印象の差が生まれているように思われた。

今回の視聴環境は、プロジェクターや音響機器などの設備が整った施設ではなかったため、パソコン（MacBook Air）からの映像をモバイルLEDプロジェクター（TAXAN KG-PL021X）で映写し、パソコンの音声をプロジェクター経由で家庭用の外付スピーカー（Logicool R-10）から出力する形となったため、特に音声の出力については条件が整って

いなかったようにも思われる。

市民へのアンケートの中で“視聴を希望する場所”としては、公民館の数値が高かったことが特徴的であった。稲沢市では地域の市民センターと併置される形で各地区の公民館が機能していることから、普段から足を運ぶ場所で視聴したいという思いから数が多くあがったものと思われる。

また、文化財に関する講座やイベントに積極的に参加・協力している市民からは、「参加者は、お寺をまわっても実際にはどの寺院にどのような仏像が安置されているのかまでは詳しく記憶しておらず、“この寺の宗派は何で、御本尊が何の仏様か”というくらいで理解が止まってしまっている。」という状況を伝えられ、そのような状況をサポートする上でも、映像作品の制作と公開には意義を感じられるとの声もあった。また、そもそも普段は一般公開されていない仏像のため、映像で細かな部分や普段見られない視点からの映像を見られることに魅力を感じるという声もあった。



【寺院での少人数向け講座の視聴環境。於：長光寺】

### ③稲沢市民以外の人々の評価

美術文化史研究会主催の金曜文化教室（2013年8月9日、於：名古屋市公会堂小会議室）で講座の講師を担当した際にも、「地域の仏像に親しむ—稲沢の仏像を中心に—」という演題の中で参加者に映像3本を視聴して頂き、アンケートによる評価を得ることができた。

視聴アンケート（回答数19名） 2013年8月9日 於：名古屋市公会堂小会議室

#### 1. 映像作品はどうでしたか？

良い（5）	12	
まあ良い（4）	6	
普通（3）	1	
あまり良くない（2）	0	
良くない（1）	0	
	計	19 平均：4.58

#### 2. 映像の内容は伝わりましたか？

伝わった（5）	15
まあ伝わった（4）	4
普通（3）	0

あまり伝わらなかった (2)	0
伝わっていない (1)	0
計	19

平均：4.79

3. このような映像作品を通して地域の文化を発信していくことに意義を感じますか？

感じる (5)	17
まあ感じる (4)	1
普通 (3)	1
あまり感じない (2)	0
感じない (1)	0
計	19

平均：4.84

4. この映像作品をどこで視聴できるとよいと思われますか？ (自由記述)

自宅のパソコン	7
図書館等の公共施設	2
テレビ放送	1

5. 自由記述

- ・ 仏像の細部が再確認できてよかった。
- ・ ナレーション音声が合わないような感じがした。
- ・ NHK 名古屋制作として放映できるとよいと思う。
- ・ 地域でこのように紹介作品をつくることは大変よいことと思います。
- ・ 今後の更新作品に期待しています。
- ・ ナレーションが今一つ。
- ・ 七寺の作品は観音・勢至が反対になっている点も説明すべきか。
- ・ パソコンが自宅にないので、映像は講座で見たい (2名)。

結果的には良好な評価が得られていると思われるが、やはりナレーションに関する指摘が見られた。このような作品を放送局やプロダクションではなく、大学で制作することに関して十分な理解が得られていない部分もあるものと思われるが、TV 放送や博物館の映像ブースで視聴したことのある仏像の映像作品がどうしても比較対象となると思われるため、特に学生によるナレーションが指摘の対象になるようにも感じられた。制作側も、このような指摘を踏まえて検証するとともに、今後良い評価を得られるような形を目指していきたい。

#### ④協力寺院の評価

完成した映像作品は、各協力寺院に YouTube の限定公開サイトの URL の案内、および映像を取めた DVD をお渡しし、内容を確認して頂いた。完成後に協力寺院から内容の修正など指摘・依頼されることはなく、作品の内容に関しても評価は極めて良好で、寺院によっては、檀信徒に DVD を配布したいという意見もあった。協力寺院の評価は、大学という場でも、放送局やプロダクションに引けを取らない作品が制作できることへの自信に

もつながるものであった。

### 3-2. 映像プロデューサーの評価

映像プロデューサーとしては、完成作品は満足できると受け止めている。レベルの高い作品を制作するには、企画、台本、撮影、編集、ナレーション、音声処理、字幕スーパー処理など、すべての工程で一定のクオリティを維持することが求められる。このうち企画・台本は、仏像専門家と映像制作者が共同で担当したことで、テレビの制作現場に比べても完成度の高い作業ができたと思う。撮影や編集などの映像制作については、外部委託をしないで、映像プロデューサーが単独で実施したが、これまでの経験を生かして、一定のクオリティは維持できたと考えている。作品ごとにテーマや内容が違うので、全体の評価は難しいが、制作した6作品は全て当初の企画意図に沿った内容に仕上がったと受け止めている。なかでも2012年度に作曲家に依頼した音楽については、特に輝いていたと感じている。2013年度についても作品イメージにあった優れたオリジナル音楽が使用できたことで、作品シリーズ全体のメッセージ性は高まったと思っている。ナレーションを担当した学生については、難しい仏教用語も無難にこなして、合格点が与えられる結果だったと思う。ただしナレーターを希望する学生が多いため、作品ごとに担当者が変わった。このため作品全体のクオリティを維持するには難しい部分もあり、今後の検討課題だと受け止めている。

### 3-3. 企画プロデューサーの評価

企画プロデューサーとして現時点でのプロジェクトおよび完成作品を見る限り、よい形でプロジェクトが動いていると感じており、作品もクオリティの高いものができていると考えている。これまでは、主に研究論文や作品解説など、文字と図版（静止画）を通して仏像を紹介する形を取ってきたが、次に記すナレーターとして参加した学生の言葉や、視聴者のコメントからも見られるように、映像作品にすることにより、文章で訴える以上のインパクトがあることを強く感じた。

学生によるナレーションも、見慣れない仏教用語や仏像・寺院に関する情報が並ぶ台本を映像・音楽から受け取った情報を自分なりに考え、豊かに表現することができており、ナレーションの技術的な向上とともに、作品への関わりを通して文化に対する理解を深め、仏像などの文化財に関心をもつようになってきている点も教育の中の取り組みとして大きな意味をもつものと感じている。今回2本の作品でナレーターを担当した学生をみても、最初の作品（青宮寺）と二本目の作品（長光寺）と比べると明らかに技術的な向上が見られることから、今後、手本となる作品が作られていくことで、新たにナレーションに参加する学生たちもそこから学ぶことが多くあるのではないかと期待している。

撮影にあたっては、映像制作の専門教員と仏像の調査経験を踏んだ専門教員が共同制作することで、放送局やプロダクションよりも一歩踏み込んだ映像を撮影できていると思われる。撮影では、当然、堂内の荘厳や仏具などを必要に応じて移動させなければならないし、場合によっては仏像そのものを動かす必要もあり、その過程でものを破損させることがあってはならない。その点、専門教員が撮影を補助することにより、作品の保護を考えながら、可能な限り詳しい情報、普段見ることの出来ないような情報、作品の見所を視聴

者に提供していくことが可能になり、このような条件が揃うのは大学という場を活動の拠点としている強みとも言えるだろう。

### 3-4. ナレーターを担当した学生の評価

今回、2本の作品でナレーターを担当した学生からは、「ナレーションを読む際には、歴史的な文化財を紹介する作品なのでその魅力が伝わるように心がけた。台本の文章だけでは感じなかった仏像の迫力や魅力などが、映像から伝わってきて、その映像に合うように読むようにしたがとても難しかった。この作品の制作に参加して、仏像への関心が湧いてきた。これまで自分とは無関係だと思っていた仏像が、身近な場所にあり、そうしたなかで、社会や時代が過ぎていることを実感できた。自分の知らなかった(仏像の)世界に出会うことが出来て良かった。友人のなかには、自分がナレーションを担当した作品を見て仏像に興味を持った学生もいた。卒業研究を通して、こうした文化情報を映像で発信できて、嬉しい。」というコメントが得られた。このような姿勢で学生がナレーションの収録に主体的に取り組んでいる点が注目されるとともに、学生がナレーションを担当することの教育上の効果・意義も合わせて存在するを感じさせられた。

## 4. コンテンツの活用について

### ① ネットでの公開

今回のプロジェクトで制作した映像作品については、現在、YouTubeの大学チャンネルでの公開とともに、「地域文化・仏像バーチャルミュージアム」(<http://bunka-archive.jimdo.com>)というホームページを作成し、公開している。現在の公開手段は、Jimdoの無料ページを使用しているが、Jimdoを利用したホームページ制作は極めて簡便であり、サイトはGoogle検索、Yahoo!検索でタイトルを入力すればトップに出てくる状態で、サイトを紹介し、検索・閲覧してもらう上でも良い状態である。ネット環境があればDVDなどの機器がない施設でもホームページの映像を使ってプレゼンテーションすることが可能であり、大学の講義で視聴する場合にもこのページを活用している状況である。

例えば、学校教育での利用を考えた場合、総合学習の課題として地域の文化財を調べる際にも、教室や自宅のパソコンを使ってこのサイトを活用してもらうことができるし、文化財を見学する前にサイトの映像をプロジェクターでスクリーンに映写して授業の中で児童・生徒に視聴してもらい、予備知識を得た上で実物を見学してもらうことも可能となる。

また、スマートフォンでもホームページ及び動画を閲覧・視聴できることから、実際に仏像を拝観する際にも、QRコードを通してサイトにアクセスし、自分のスマートフォンが音声ガイドに代わるものとして利用できるの、鑑賞の補助となり、各寺院がカセット



テープ・CDなどによる音声ガイドや解説ビデオなどを準備する必要もなくなる<sup>3)</sup>。

ただ、現状は無料ページを使用しているため、大学と地域が連携した活動として情報を発信していく場としては、企業公告が画面に出ている点に問題があり、サイトのチェック機能として、アクセスカウンターが無いことも制作側が利用者の閲覧状況を把握できない点に評価という点で問題があるため、現在正式なホームページを制作中である。



(ホームページのQRコード)

## ② DVD版の制作

インターネット上での公開に加えてDVD版も作成した。DVDは、タイトル画面があり、チャプターで視聴したい映像を選択出来る形に編集されている。ネット環境のない施設などの場合、このDVDを使用して視聴してもらうことが可能であり、寺院に撮影の依頼を行っていく上でも、依頼状とともにDVDを事前にお送りし視聴してもらうを通して、プロジェクトに対する理解を得やすくなったように思われる。

DVDを配布することを通して、「形」ある物として協力寺院に映像制作の成果を伝えることができ、各寺院で映像作品を保存して頂くこともできる。また、ディスクの複製に関して制作者側は著作物としての利用制限を設けていないため、各寺院で必要に応じて檀信徒や参拝者に配布して頂くこともできる。メディアに関しては、今後はBlu-ray版も制作する方向で考えている。

## 5. 今後の課題・展望

平成24年度に開始した本プロジェクトは、平成25年度も椋山女学園大学学園研究費(A)の助成を得ることができ、「地域連携によるバーチャルミュージアムサイトの構築とその実践的研究」という形で研究分担者を増員して継続しており、今後は市教育委員会ともより連携を図りながらプロジェクトを進めていきたいと考えている。

映像作品の制作においては、教育学部の教員が制作したオリジナル音源の使用や、学生がインタビュー、ナレーターを担当するなど、大学の教育現場で制作するオリジナル溢れる映像作品の制作を継続し、将来的には台本の制作、撮影といった現在、教員が行っている部分も学生が担当する作品も制作していけたらと考えている。現状は仏像が中心となっているが、その他の美術工芸品や史跡・記念物などに対象を発展させていくことも可能となるだろう。

また、平成25年度は国際コミュニケーション学部の教員・学生の協力を得て、これまで制作した映像の英語版の制作も行っている。海外へも日本の地域文化を紹介し、現在、文化を守っている人々の声や思いを合わせて発信していくことで、単なる物質文化(古美

術品)としての仏像の価値だけでなく、仏像が経てきた歴史、仏像が残されている地域やそこに生きる人々のところもメッセージとして伝えていきたいと考えている。観光地に見られる文化だけが日本文化のすべてではなく、各地域に育まれた文化の中にも優れた遺産は残されており、そのような文化を育んだ地域の風土にも関心を集めることができたらと思う<sup>4)</sup>。

ただし、情報の公開においては注意が必要な部分も存在することを忘れてはならない。例えば、寺院への撮影依頼の段階では、現段階においても映像化およびインターネット上への配信を断られるケースもあった。寺院との関係が悪いわけでも、管理者にプロジェクトの主旨が理解されなかったわけでもないが、仏像の中にはそもそも「秘仏」とされているものがあるからである。この点に関しては、“信仰対象となる仏を秘すこと”に信仰上の大きな意味があり、それも一つの文化の姿と考えていくべきであると思われる。仏像が「秘仏」とされる背景には、宗派の意向、寺院の意向、地域の人々の意向、慣例、尊像の保存状態に問題があるため、など様々な理由があるが、何でも記録・配信すればよいというのではなく、今日まで受け継がれてきた地域の信仰のあり方・慣例などを尊重することは大切なことである。



また、今回、映像を公開している作品の中にも通常は非公開の形を取っているものも含まれている。このような作品に関しては、ホームページで映像作品を公開する際に必ず定められた公開日を表示するようにした。視聴者は、“情報が配信・公開されているのだからいつでも見られる”と思いがちである。このような事態は映像配信に限らず、刊行物に文化財が掲載された際にも同種のケースがあり、出版物の場合には凡例などにその点への配慮が記されることとなる<sup>5)</sup>。

文化財調査を担当する中では、文化財を管理する寺院が抱える苦勞を耳にすることも多い<sup>6)</sup>。観光寺院であれば拝観料に見合ったサービスの提供も必要となるが、一般の寺院では、多くは日常の寺務の傍ら無償で対応する形となる。そのような寺院に与える負担やリスクも情報を発信していく側は考えなくてはならず、観光事業などに結びつける場合には事前のリスク・マネジメントも必要となるだろう。

文化財の管理者となっている寺院には、盗難や火災など文化財の管理に関わる責任に加え、訪問者や問い合わせへの対応といった負担が日常的に伴うことになる可能性も考えておかねばならず、文化財を地域振興に活用していく際には、その負担が管理者だけに及ばないよう地域全体で検討していく必要がある。そのような場合、文化財の保存・活用にとのくらしい地域の理解が得られるかも大きな課題となる可能性がある。

制作した映像作品の中に各寺院の住職(前住職)にお話をお伺いする部分を設けたが、これはオーラルヒストリーとして寺院や仏像に関する伝承を記録する側面とともに、文化遺産は、地域において過去に守ってきた人々、そして今守っている人々の存在があって未来へ伝わっていくものであることを視聴者に伝えたいという思いがあったからでもある。

文化財そのものの“資料的価値”，“お宝的な価値”に関心が集中しがちであるが，学術的な情報の伝達とともに，特に地域における文化の継承を啓発し，継承者を育成していく上でも，制作した映像作品が意味を持つものとなるようなプロジェクトを継続していきたい。

#### 附記

本研究は，平成24年度椋山女学園大学学園研究費(C)および平成25年度椋山女学園大学学園研究費(A)の助成によるものです。記して御礼申し上げます。また，撮影にあたりご理解とご協力を賜りました稲沢市教育委員会様，各寺院様に心より御礼申し上げます。

#### 注

- 1) 日本で，仏像が初めて「彫刻」として分類されたのは，明治13年（1880）4月1日から60日間にわたり上野公園内で実施された第1回観古美術会とされる。（浅井和春『日本の美術 456 天平の彫刻 日本彫刻の古典』付論「仏像と近代」，至文堂，2004年）。
- 2) アンケートの中の平均とは，視聴者の評価を5点～1点で点数化〔表の中の（5）～（1）〕した際の総得点を回答者数で割った平均値を指す。
- 3) もしスマートフォンを音声ガイドとして用いる場合，持ち歩きながら鑑賞することで何かにぶつかってものを破損させたり，スマートフォンそのものを落として文化財等を破損させることがないように，注意を呼びかけていく必要もある。
- 4) 海外からの観光客を視野に入れた場合，外国人の対応とともに，案内表示の多言語化なども考えていく必要が出てくるだろう。また，様々な国からやってくる外国人の文化財に対する意識がどのようなものかも想定し，文化の理解の違いによるトラブルが生じないようにしていかなくてはならない。
- 5) 仏像の盗難が相次ぐ状況の中で，情報公開に関しては慎重な対応が求められる。特に，写真，大きさ，所在などを掲載した刊行物は，学術的に意義のあるものではあるが，その様な刊行物が一方で窃盗の際のリストになりかねない面も併せ持っていることも考えなくてはならない。
- 6) 例えば，文化財を鑑賞しに寺院に足を運ぶ人のマナーの悪さがあげられる。トイレの使用方法が悪い，訪問者が出すゴミの問題，文化財指定を受けている建物に土足である，文化財が自分の思っていたようなものでないと「何だ，こんなものか」というような言葉を管理者に対して吐く人も時にいるようである。

【資料1】

【作品名：七寺・観音菩薩坐像、勢至菩薩坐像】 撮影台本第3稿 構成＝4分00秒 9月29日作成

<p>〈映像素材〉</p>	<p>〈ナレーション〉</p>
<p>2体の菩薩像</p>	<p>【プロローグ+タイトル】23秒 名古屋市を中心部（中区大須）にある、七寺（ななつでら）に安置される2体の菩薩像。人々を慈悲の心で見守る観音菩薩と、智恵の光で導く勢至菩薩。名古屋空襲の火災から救い出された仏像です。</p>
<p>タイトルベース</p>	<p>タイトルスーパー 5秒</p>
<p>稲沢市・仏像シリーズ② 木造観音・勢至菩薩坐像 ～大須・七寺～</p>	
<p>七寺 外観 本堂</p>	<p>【寺の紹介】22秒 真言宗智山派（しんごんしゅう ちさんは）の寺院、七寺（ななつでら）。かつては現在の稲沢市にありましたが、清洲へ移り、慶長16年（1611）に現在の場所に移りました。</p>
<p>2体の菩薩像 観音菩薩 勢至菩薩 2体 金箔 眼・玉眼 2体の菩薩像</p>	<p>【仏像①…概要】40秒 本堂に安置される2体の菩薩像（ぼさつぞう）。両足を組んで坐っています。 観音菩薩（かんのんぼさつ）、高さは138.5cm。 勢至菩薩（せいしぼさつ）、高さは139.1cm。 ともにヒノキを材料にした寄木造（よせぎづくり）で、体には金箔（きんぱく）が押されています。 眼は水晶（すいしょう）をはめ込む「玉眼（ぎょくがん）」です。 平安時代後期の制作で、国の重要文化財に指定されています。</p>
<p>菩薩像 髪型 下半身→上半身 額の白毫 2体の菩薩像</p>	<p>【仏像②…詳しい姿】60秒 「菩薩（ぼさつ）」とは、仏教では悟りを求める修行者のことです。 綺麗に結い上げる髪や身につける衣装は古代インドの貴族の姿。 釈迦が出家する前、王子であった時の姿をモデルにしています。 額（ひたい）には仏（ほとけ）であることを示す特徴の一つ、白毫（びやくごう）があらわされています。 ☆字幕スーパー：白毫（びやくごう）</p>

地域に伝わる仏像のハイビジョン映像化とその活用に関する研究

<p>勢至菩薩の光背 12体の飛天  2体の菩薩 親指と中指 手のひらを 1体 → 1体</p>	<p>勢至菩薩（せいしぼさつ）が放つ光を表現した光背（こうはい）も制作当初のもの。 天を舞う12体の菩薩と、勢至菩薩のシンボルである水を入れた瓶が あらわされています。  2体の菩薩は、片手は肘を曲げて親指と中指を合わせる仕草、 もう片方は手のひらを差し出す仕草をしており、 左右対称の姿であらわされています。 何故でしょうか？</p>
<p>2体の菩薩→中心 名古屋空襲・写真？</p>	<p><b>【仏像③…人々に伝えること】 35秒</b> この2体の中心には、かつて阿彌陀如来坐像（あみだによらいごぞう）が 安置されていましたが、昭和20年の名古屋空襲で焼失してしまいました。</p>
<p>観音菩薩と勢至菩薩</p>	<p>観音菩薩（かんのんぼさつ）と勢至菩薩（せいしぼさつ）は、 阿彌陀如来（あみだによらい）のもとで修行する菩薩（ぼさつ）の代表者。 人々の苦しみを慈悲の心で救い、進むべき道を智恵の光で照らします。 この2体の仏像は、七寺本堂に再現された極楽浄土の阿彌陀三尊像（あみださんぞんごぞう） のなかで、空襲の火災から救い出されたものなのです。</p>
<p>見田・ご住職 2S ご住職 1S</p>	<p><b>【ご住職様の話】 30秒</b> Q 「この仏像は、空襲のときに、どのようにして守られたのですか？」 A 「御住職様の話」(約20秒)</p>
<p>観音菩薩と勢至菩薩</p>	<p><b>【まとめ+ END】 30秒</b> 貴重な文化遺産でも、天災や人災などで失われるものがあります。 時代の移り変わりを見つめて来た2体の仏像。 文化は、それを守る人と、そうした思いによって、 未来へ継承されることを、私たちに伝えていきます。 〈制作スタッフ・スーパー（ヨコ・ロール）〉 ナレーター（参加学生） 撮影・編集・音声（参加学生） 音楽 mari プロデューサー 見田隆鑑 析窪優二 協力 七寺 制作 椋山女学園大学 見田研究室・析窪研究室</p>